

ぞうほ すがわらでんじゅてならいかがみ  
**増補 菅原伝授手習鑑**

〔解 説〕 嘉永五年（一八五二）京都寺町四条道場芝居での人形浄瑠璃興行が初出。『菅原伝授手習鑑』の四段目の中「北嵯峨の段」の後日譚、四段目の切「寺子屋の段」の前日譚となります。

〔あらすじ〕

松王と千代の夫婦は、菅丞相の御台所をかくまっています。そこへ藤原時平の家来である春藤玄蕃がやってきて、菅丞相の子の菅秀才が武部源藏の元にかくまわれているので首を打てと命じます。千代は菅秀才をかくまわなくてはと言いますが、松王は菅秀才の首を打つと言います。千代はあまりのことに、息子の小太郎とともに自害しようと決意します。その様子を見て松王は菅秀才の代わりに小太郎を身替わりに差し出す本心であることを打ち明けます。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

## 松王屋敷の段

八重一重、九重近き片ほとり、新たに建てしひと

構へ、庭の立木もおのづから、主に連れて色つやも、

今を栄えと松王が、こゝに住居も奥深き、心を誰か

悟るらん。早玄関へ高提燈、主の威光を肩で切る、

素袍の色の縹より、鼻高々と入り来たる、時平が家

来春藤玄蕃、上座へむづと押し直る。斯くと知らせ

に主の松王、病苦になやむ額際、押して静々出迎ひ、

「やははく御上使とあつて玄蕃殿、御苦勞先萬、

病中なれば略衣は御免下さるべし」

と、一礼述べれば、

「成程く、病中なれども、時平公より、仰せ付け

らるゝその仔細といへば、先達てより、行方知れざ

る菅秀才の在家、今日訴人の者あつて、武部源蔵と

いふ奴、北山芹生の里に、筆道指南に世を渡り、我

子としてかくまふ由、それにつき、未だ菅秀才の顔

見知りし者なき故、其方に検分の役仰せ付けらるゝ、

がいよく菅秀才に相違なくば、首にして持参せよ、

コリヤ褒美には其方がかねて申し出せし、病氣保養

の願ひ、御聞き届け下さるゝ。又病氣本復次第、播

磨の守になされふとある、イヤモ有難い主人の嚴命。

サ、早く用意を致されよ」

と、いふを一と間に女房が、立ち聞く耳に打ち寄す

る、夫の心しら浪の、胸にたゞよふばかりなり。松

王ハツと頭を下げ

「ハ、有難き御意の趣、松王が家の面目、ヤモ此の

上なし、早速承知仕る、が病中なれば、萬事の手配

り心に任せず、シテ其源蔵といふ奴、某討手に向ふ

を聞かば、風をくらつて落としやらんもはからわれ

ず」

「ア、イヤ／＼其義はちつとも気づかひなし、高が浪人の瘦住居、取巻くも余り、仰々し、ハハハ」

「ア、イヤ左様ではござらぬ、恐れ多くも時平公の御威勢を以て、御詮議厳しき菅秀才を、かくまふ程の源蔵。ヤ油断はならぬ」

「ム、成程逃げ失せなば我々が落度とならん」

「左様でござる、貴殿御苦勞には候へども、願はくば夜の中に、村の出口へ組子の御用意」

「いかさま、然らば是より何かの手配り」

「さあらば、未明に同道致さん」

「万事は明朝」

「ハ、御苦勞千萬」

と、互ひに目礼式台に、悠々として立ち帰る。後打ち眺め松王は、何か心に一と思案、明くる襖を待ち

かねて、千代は夫の傍により、

「コレ申し今の上使の様子では、若君様の御在家、確かにそれと知れたれば、討手の行かぬその先に、ちつとも早ふ此の内へ、お迎ひ申す御用意を」とせり立つ女房。

「ハ、ハ、ハ、麻につれる蓬といへど、此の松王が所存の程、其方はよも知るまい、北嵯峨の隠れ家より、御台を奪ひ帰りしは、菅秀才の首もろとも、時平公へ御目につけて、官位の身となる家の栄」

「シエースリヤ御台様をおかくまひ申したは、アノ時平様へお渡し申すお前の心であつたか。エ、お前は／＼お前はなア、いつの間に其様な、恐ろしい気には、ならしやんしたぞいのふコレ」

道に背いた天罰はお前ばかりか科もない、子に報はいで何とせふ、どうぞ心を取り直し、お二方のお供

して、筑紫にござる丞相様へ、お渡し申して共々に、お力になつてたべ、拝むわいのと手を合せ、夫を思ふ真実の涙に誠あらはせり。松王はせゝら笑ひ。

「ヤア要らざる繰言、親兄弟の縁切れば、恩もなくまた義理もなし、日影者に涙をかけ、倅の出世を思はぬ馬鹿者、非義非道も我子の為、子に代へる宝はないわい。無益の繰言洩れ聞こへ、御台を逃さば「大事」

と、駆け行く裾をとどめる女房、エ、邪魔するなど勿ね除け突き退け、一と間の内へ入りにけり。ハ、アーはつとばかりに女房は泣くも泣かれぬ身のせつなさ、暫し絶え入り居たりしが、

「オ、それよ、とても直さぬ夫の悪心、何にも知らぬ小太郎まで」

共に悪事を見習はせ、非業な最期をさせふより、一

所に連れて死出三途、せめては後世の便りとも、又一つには小太郎が、此の世に無くば松王殿、心も折れて本心に、立ち帰つて下さらば、死んでも嬉しふ思いますと、今死ぬる身の覚悟にも、夫を思ふ心根の、果てし涙に九つの鐘は我子の年の数、縮むばかりの憂き思ひ、虫が知らずか奥の間より、

「コレ母様、奥にござるお客様が、呼んでこいとおつしやる。早ふく」

と余念なき、顔見るよりも悲しさの、涙呑み込み呑み込んで。

「コレ小太郎、ここへおぢや、今此の母がいふ事を、よふ聞きや。奥にござるお方は、父様や此の母や、又そなたの為にも、大事のくお主様、そのお方を父様が殺さふ、といふ恐ろしい心、もしさふなつては此の母が、どうも生きては居られぬによつて、母

もお供をするわいのふ」

「母様が死なしやるなら、わしも一所に死ぬわいのふ」

「オ、よふいやつた、可愛いや／＼／＼かわいやな、  
こういふ事のあるふはしか、桜丸殿の菩提にとこし  
らへ置いた此幡が、我子の為にならふとは」

神ならぬ身の白幡に、印す六字の名号は、せめて此  
の子の道しるべ、迷はぬ為と目を閉じて、用意の懐  
劍抜き放し、既にこうよと見えたる後ろに

「ヤレ早まるな女房」

と、声をかけて松王丸、御台の御手をしづしづと、  
上座へ直し、

「ハ、恐れながら御台様はじめ女房も、某が心底嘸  
不審、今こそ明かす本心を」

物語らんと威儀を正し、

「さても御家没落より、時平公を主人と仰ぐも忌は  
しく、何卒折を見合せ暇を乞ひ請け、菅秀才の御行  
方を尋ね奉り、再びお家を興さんと、心を千々に砕  
けど、チエ、なさけなや、先刻主人の厳命、菅秀才  
を検分の役目を請けし身の当惑、忠義一途の源蔵な  
れば、やはかむざ／＼若君を、討つて渡す所存はあ  
るまじ、なれども多勢に無勢、もし若君に過ちあつ  
ては詮もなく、とやせんかくやと思ふ中、先程御台  
のお詞に、小太郎が面ざしの、我子に似たとの御嘆  
き、シヤ是屈竟の御身代りと、ヤイ小太郎頑是なく  
ともよく聞けよ、仮初ならぬ若君の御身代り、大切  
な役目なれば、必ず共に未練な死をいたすな、もし  
逃げ隠れなど致しなば、父が子でないぞよ。若君の  
御為、潔く命を捨てよ」

と、いひ教ゆるも父親が、肉もとろくる不憫さを、

忠義の為とくひしばる、見るに目もくれ女房も、御  
台も共に声を上げ、わーつとばかりに泣き沈む、心  
ぞ思ひやられたり。

「コレ母様、そんならもふ行くのかや、父様誉めて  
下されや」

と、稚心の立派さを、思ひやつたる父親の、顔を背  
けて洗面も、忠義の為とあきらめて、取り出す小袖  
もかゝる身に、なると白地を染め上げし、六筋の涙  
明け六つの、鳥は憎しと詠み給ふ、それは出船の御  
名残り、これは弘誓の船さして、あの世へ急ぐ愛別  
の、子の死に顔に逢ひに行く。空定めなきひと雫、  
枝に洩らさぬ涙の雨や、ひと葉は枯れて又ひと葉、  
緑を残す影向の、松にあはれをとゞむらん。